

〈シンポジウム〉香粧品原料をめぐる問題点

香粧品原料としての油脂系原料

阿 部 龍 二*

The Oily Materials of Cosmetics

Ryuji ABE*

わが国の化粧品出荷額は、昭和50年の実績によると約5000億円で、使われた原料は約4万トン、その中、油脂系原料が20%を占め、エタノール（50%）に次いで第2位にランクされている。また油脂系原料の構成比は、炭化水素が60%（80%が流動パラフィン）、植物油17%、ロウ、脂肪酸がそれぞれ10%前後となっている。

従来、油脂系原料は、毛髪や皮膚に対して疎水性被膜をつくるので、外部からの刺激を防ぐとともに柔軟性や光沢を付与する。その上コスト的にも安い等の理由で使われてきた。

しかし、毎日繰り返し使われる化粧品に配合されるだけに、例えば皮膚の表面を油性皮膜で密封し、汗の蒸散を妨害し易い油にかえて、通気性皮膜をつくり皮膚呼吸のし易い分岐鎖を有する化合物を使おうとする傾向や、最近の社会的風潮として安全性、公害、省資源等の面から見直そうとする動きがある。

本稿本文の内容は、油脂系原料に必要な要因を、安全性、安定性、供給性（コスト）、および組成よりとらえた特性要因図で解説し、上記特性要因図を基にして、前半は油脂系原料全般について、「香料品原料とは」、「油脂系原料の使用目的」、「油脂系原料の留意点」と題してまとめ、後半は、各油脂系原料について各論的に、問題点およびその対策等について解説した。